

「孤独とは何か？」

2016年11月19日(土)

カフェミヤマ渋谷公園通り店 第1会議室

参加：11名

司会・文責：堀越

1. 概要：

- ・初参加者1名を含む総勢11名で、主に、どんなときに孤独を感じるか、孤独を主観的に感じる際の条件や構造とはどういうものか、という2つについて考え、対話を深めた。

2. 対話：

(0) 問いの提起

- 進行役から、今夏に叔母が孤独死したことを紹介し、「人は、どのような状況であっても、孤独に生まれ、孤独に死ぬ」ことから孤独死を“孤独”と呼ぶことに違和感があり、孤独をテーマとした旨を説明した。

(1) どんなときに孤独を感じる・感じないか？

- ・感じる：①人と話をしているとき。②何かをして充実しているとき。
- ・感じない：③「人からどう見られるか？」を気にしないからか。
→「人からどう見られるか？」が孤独を感じることに関係あるのか？は分からない。
- ・「人からどう見られるか」は関係しているかもしれない。学生時代に自分一人で買い物に行こうと決め、買い物をしていた。そのとき、偶然友達グループと会い、彼女達から自分がどう見られているかと思うと同時に、自分で自分を見つめて今自分が一人であると気付いて、明日クラスで「買い物に付き合ってくれる友達もいないのか」と言われるかと想像し、そのときに孤独を感じた。

(2) 孤独という言葉の印象

- ・孤独は、マイナスやネガティブの代名詞となっていないか。だから、他者から自分が孤独と思われるに怯えるのではないか。
- ・ネガティブかどうかは他者にどう映るかにもよる。最初は孤独に映っても、その人が格好良いと思えば、孤高と呼び、そうでない場合は孤独と呼ぶのではないか。

(3) 孤独と孤立？

- ・人の客観的な状態を表現するときは「孤立」と呼び、逆に、主観的な状態を表現するときは「孤独」と呼ぶのではないか。
- ・孤独には、「客観的な孤独」と「主観的な孤独」がある。「客観的な孤独」は孤立と同義だが、主観的な孤独はそれとは別である。「主観的な孤独」は、主観的と言いながら、ある程度客観的な条件で決まっているのではないか。
- ・孤独を感じるときは寂しいときであり、だから、感情・主観で決まっているはずである。

(4) どんなときに孤独を感じる・感じないか？（再び）

- ・例えば、自分が自由意志で決めて、太平洋を一人ヨットで横断しているとき、孤独を感じるのだろうか。自分だったら、孤独を感じるのかどうか分からない。
- ・一人で焼肉に行ったことがあるが、そのときに感じた。
→自分が女性であり、周りは男性かグループかしかいないため、女性が一人である自分を想像してみて孤独であると感じるのではないか。
- ・一人カラオケに行くことがあるが、そのときには感じない。何かに熱中・集中しているからか。
- ・友達とのカラオケで、自分以外の友達が唄を歌うことを楽しんでいる一方、自分がそれを共有できないときに、孤独を感じる。だから、他者と一緒でも、何かを共有できないときに感じるのではないか。

(5) 社会的な条件なのか？

- ・社会において「普通ではない」「他とは違う」という状態を孤独と呼ぶのではないか。
- ・社会にいる人間が絶対的に孤独を感じるときは、「血縁に身寄りがない」という状態を指すのではないか。

(6) 孤独を感じる条件・構造

- ・人は、孤独である状態のときに、何を求めているのか、求めていないのか。
- ・生物学的には「集団と一緒にいると有利、逆に、一人は不利」という原則に従って、一人であることは不利であるため、自分達人間はその理由を分からないが、それを孤独として感じるのではないか。
- ・主観的な孤独には、生物が本能的に持つ低級な孤独感と、人が社会的な生活の中で抱く高級な孤独がある。
→低級な孤独感とは、シマウマが群れから離れないようにするときに感じるようなものではないか。
→その低級な孤独は本能であって、シマウマは孤独を感じていないので、あえて区別不要ではないか。
- ・前半で話が挙がった一人での買い物の例の中でも出たが、自分の中に、何かを「考え、意識する私」とその自分から客観的に俯瞰して「見られている私」がいる。一方、自分は、他者からどう見られているかを意識もしている。一人だけの状態でも、友達等の他者と一緒の状態においても、この「考える自分」が「見られている自分」を俯瞰して見るときに、孤独を感じるのではないか。
- ・こういう構造であるとき、何かを他者と共有していたり、何かに自分が熱中したりしているときには、自分を俯瞰で見ることがないため、孤独を感じることはない。
- ・孤独はどうしてもその状態には耐えられない、そこから逃れたい、との強い気持ちがあるのではないか。
→そう言った覚えはないが、人は、自分の有限の身体で区切られていて、これが自分と他者との絶対的な壁となっている。この他者との隔絶感はどうしようもない。だが、ときに、他者である相手から自分の期待通りの反応があると、その絶対的な隔絶感を何らか埋めることができるのではないか。
- ・そういう孤独の正体とは何なのか。状態か、性質か。それ以外の何か。

(7) 宗教の今昔

- ・人には、どうにもならない煩悩、嫌な気持ちがある。その中で、死や孤独は昔から忌み嫌われてきた。これらを根源的に人は避けようとしてきたはずであり、その努力を人は昔からしてきたのではないか。
- ・そういう中でも、僧侶（お坊さん）は、昔からこういうことに向き合ってきていて、今でも向き合っているのではないか。

3. まとめ：

- ・下記の点については時間切れで対話できなかったので、次の機会に採り上げてみたい。
 - 「孤独を感じる」と「自分が他者からどう見られているかを思うこと」とがどう関係しているか？
 - 孤独の正体は、状態か、性質か、それ以外の何か？

以上